

音楽の散歩道 その8

— 指揮者のお仕事 —

キラメキテラス ヘルスケアホスピタル | 栗 博志・高田 昌実・田島 紘己・上村 章
 | 加治木温泉病院 | 夏越 祥次 | 東区・荒田支部 | 栗 隆志
 | 大海・大海宮崎クリニック | 大西 浩之・海江田 寛・牧野 智礼

はじめに

令和6年2月に小澤征爾氏が死去された。
 謹んで哀悼の意を表します。

従来、ドイツ・オーストリア系、更にはフランス系指揮者が主流だったクラシック音楽界も、第2次大戦後の航空機、国際交流の発展と共に、指揮者の世界でも国際化が急速に広がった。小澤氏は、そのような潮流の中で、日本を代表する指揮者となった。

彼は、1960年にパークシャー音楽祭でクーセヴィツキー賞受賞後は、トロント、サンフランシスコ、ボストン、ウィーンと、第一線で長期間に亘り指揮活動を行った。

特にボストン交響楽団での29年間の活動は、日本人として特筆に値しよう。

図1左は、サンフランシスコ響でのLPでのサイン、中は色紙でのサイン、右はフランクリン・ミント・レコード協会の写真。サインは、中央を避け、小さく書かれているが、丁寧で彼の性格の一端を示している。



図1 小澤のサイン:左はLPジャケットのサイン,中は色紙のサイン

(付録) チャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番とボストンとビューロー

小澤の活動したボストン響は、1881年の創設で歴史があるが、それ以前にピアノ演奏史上、最も重要な演奏会の1つがこの地で行われた。

チャイコフスキーは当初、彼の重要なP協奏曲をニコライ・ルービンシュタインを初演者に迎えて献呈しようとしていたが、草稿

の段階で、ニコライに「演奏不可能」などと酷評を受けた。

やむなく彼は、リスト及びワーグナーの高弟のピアニスト・指揮者のハンス・フォン・ビューロー（ドイツ人）に献呈した。ハンスはこの曲を、1875年にボストンで初演し、大成功した。

後述するが、アルツウーロ・ニキシエは、ボストン響を指揮した（1889-1893）。

本稿では、ドイツ・オーストリア（ウィーン）の作曲家・指揮者として、ベートーヴェン→（チェルニー）→リスト，ワーグナー→ハンス・フォン・ビューローの流れを確認すると共に，ワイマール時代のリストの指揮活動の一端を紹介し，更に代表的な管弦楽団であるベルリン・フィルおよび20世紀の指揮者の一部を紹介する。

〔1〕演奏家が作曲家，指揮者を兼ねた時代

バロック音楽の時代より，楽器の基本はピアノ（クラヴィーア，チェンバロ，クラブサン，ハープシコード）とオルガンである。

ピアノは広い音域を持つと共に，その鍵盤は左から右に，規則性を持った音列として低音から高音に並んでいるから，非常に理解し易い。

弦楽器や管楽器と異なり，楽器を習っていない子供が鍵盤を叩こうが，名ピアニストが叩こうが，音程は変わらず同じ音がでる。

鍵盤の音は容易に音符として，五線紙に移し替えられ，楽譜として保存される（ピアノの鍵盤を縦に置けば，そして＃と♭を加えれば，それは既に五線紙である）。極めて合理的，簡便である。

以上の利点から，音楽家を目指す人は，その基本として，まずピアノを学習する事が多い。ピアノの大家は，作曲の大家である事が多く，作曲の過程で音楽に精通する。

この音楽に精通している事こそ，指揮者の必要条件となる（十分条件ではない）。

従ってピアニスト，作曲家の系譜を辿れば，即，指揮者の系譜となる。重要な音楽家の多くは，10歳前後でその能力を世間で認められている。ここでは，ピアニストの系譜，ベートーヴェン，チェルニー，リスト，ビューローについて述べるが，作曲者・指揮者の系譜にも繋がる。



図2 指揮姿のベートーヴェン

（1）ベートーヴェン（1770-1827）

少年時代ボンで，彼は父ヨハンからピアノを習い，宮廷オルガニスト・エーデンにピアノとパイプオルガンを，ロバンティニーにヴァイオリンとビオラ……を学んだ。

そんな中，彼の真の能力を最初に見抜き，高く評価したのは，バッハの伝統を引き継ぐ，ライプチヒの聖トーマス教会の合唱長・ヒルラーの弟子のネーフェ（1748-98）であった。

1781年，ヨハンの依頼で，11歳頃のベートーヴェンは，ネーフェの弟子となる。

ネーフェは，極めて重要な練習曲集・バッハの「平均律クラヴィーア曲集」（以下「平均律」と略す）を教材として彼に与えると共に，作曲も指導した。

ネーフェは，彼の作曲，初見能力に加え，13歳の彼が「平均律」の大部分を学習できた才能を評価し，「第2のモーツァルトになるだろう」と予言している。なお彼は，モーツァルトの演奏を何度も聴いている。

（音楽史上，最も偉大な才能に恵まれ成長したメンデルスゾーンとバッハ，「平均律」と「マタイ受難曲」の復活演奏の指揮については，本誌第61巻第6号，2022に既に述べた。ただメンデルスゾーンは，その後継者を育てる事はなかった。メンデルスゾーンのこの1829年の「マタイ」の指揮は，指揮者の

意義をみせつけた最も重要な範例である。)

図2は、ラズモフスキー弦楽四重奏団（演奏者も確認可）で指揮するベートーヴェン。

(2) カルル・チェルニー (1791-1857)

チェルニーは、プラハの修道院で音楽教育を受けた父・ヴェンツェルにピアノを習い、1800年、9歳でベートーヴェンの弟子となる。

10歳の時には、初見演奏にも習熟し、モーツァルト他、多数の曲を暗譜で演奏できた。10-13歳の時には、モーツァルト未亡人の毎週日曜日の「音楽の夕べ」に出席し、多大の刺激も受けた。

特にこの音楽サロンでは、モーツァルトの高弟で、更にロンドンのクレメンティに学んだ、ベートーヴェンと並ぶ当時の巨匠・フンメルに圧倒され、共感と憧れを抱いた。

ベートーヴェンはチェルニーに、まず全調のスケールをさわらせ、運指の重要性と、レガート奏法！をたたき込んだ。

ベートーヴェンは、甥のカールの指導をチェルニーにまかせたが、計画的な訓練、運指、正確な拍子の維持に加え、「曲の途中で演奏を中断せず、曲を弾き終えてから、誤りを指摘するように」など、細かい点にまで注文をつけている。

チェルニーは、1806年、14-15歳頃にピアノ教師になるが、高額のレッスン料にもかかわらず、沢山の生徒で多忙だった。

「平均律」第1巻のチェルニー校訂版の序文で、ベートーヴェンから受けた影響を記している。

彼は生涯、勤勉にピアノ教師として重要なピアノ教則本など作品番号付きだけでも861曲を作曲したが、指揮を行う余裕はなかった。

彼の最大の功績は、リストとレシエティツキーを育てた事で、それにフランスのジンメルマンを加えた3人が、その後のピアノ界を、主に牽引する事になる。

(3) フランツ・リスト (1811-86)

リスト少年は、1822-23年のわずか14ヶ月ではあるが、ウィーンでチェルニーにピアノを習った。これがリストが専門のピアノ教師から受けたピアノ教育の全てである。

働きざかり、31歳のチェルニーは、ベートーヴェンから引き継いだ教育法に加え、自身が獲得した方法に基づき、特別に無償で教育し、基本的演奏技術、運指、正確な拍子の維持の重要性、曲の歌わせ方などを伝授。

リストは短期間で、チェルニーの教えを吸収し、フンメル、モシュレス、ベートーヴェン、バッハ……などの曲を初見で、また短時間で暗譜で弾く事が可能となった。

チェルニーは、この勤勉で驚異の才能を持つ少年を、一人前の立派な演奏家に育てた。

(4) ハンス・フォン・ビューロー (1830-94)

ハンスは、9歳でクララ・シューマンの父・フリードリヒ・ヴィーグにピアノを習い始めた。

両親の希望でライプチヒ大学で法律を学んでいたが、リストにピアノ演奏を称賛され、またリストに庇護されていたワーグナーにも心酔し、その弟子にもなった。



図3 ハンス・フォン・ビューロー

彼は、ワーグナーの「トリスタンとイゾルデ」「ニュールンベルグのマイスタージンガー」を各々、1865、68年に初演した（これらの名曲を世界初演する事は、歴史に残る業績である）。

彼とリスト、その次女コジマ、ワーグナーの4人の関係はやや複雑である。

彼は、57年にコジマと結婚。然し69年に離婚。翌70年にコジマはワーグナーと再婚し、ワーグナーの死後（83年～）はバイロイトの女主人として、その音楽祭を守り続けた。幸い彼は、82年に女優と再婚した。

彼は、バッハ、ベートーヴェン、ブラームスを「ドイツ3B」と呼んだり、バッハの「平均律」を旧約聖書、ベートーヴェンの32曲のPソナタを新約聖書に準えた事、前記のチャイコフスキーのP協奏曲の初演者としても知られている（図3）。

ここに、基本的には、ベートーヴェン→チェルニー→リスト、ワーグナー（楽劇）→ビューロー、というドイツ・オーストリアの音楽家の潮流が生じ、専門の指揮者の時代が到来するというのが、私の見解の概要である。

現代では、リストとワーグナーの薫陶を受けたビューローが、専門の指揮者の始まりと考えられている。

ビューローは、64年のミュンヘンを始めとして、バイエルン、ハノーヴァー、マイニンゲン（ここではリヒャルト・シュトラウス

を見出し、助手に採用）、そして82年にベルリン・フィルの常任指揮者となる。ここからベルリン・フィルの快進撃が始まる。

〔2〕バロック、古典派、ロマン派時代を通じ最も偉大な指揮者、フランツ・リスト

20世紀初頭位までの大作曲家達、ウェーバー、メンデルスゾーン、ベルリオーズ、リスト、ワーグナー、ブラームス、マーラー、Rシュトラウス……らは、疑いもなく大指揮者であった（図4）。

ただ本邦では、ほんの30年前までは、私共リストの愛好家以外は、「指揮者・リスト」の偉大さを認識している者は、音楽の専門家や評論家達の中ですら、ほぼ皆無であったし、その前にリストに対し、正確な認識を持つ人もほとんどいなかった。

後で引用させて頂くが、指揮者に関する本邦の代表的、重要な本「指揮者のすべて（音楽の友社、1996）」の中の対談「十九世紀の指揮者たち」を一読してみると、「リスト」の名は一言もでてこない。

その理由は簡単で、欧米の重要な著作を読んでいないからだろう。

ここではALSメンバーのAlan Walkerの大著「Franz Liszt, vol.2, The Weimar Years, 1848-1861」（AAKnopf）から若干の引用をさせて頂き、その業績の一部を紹介する。

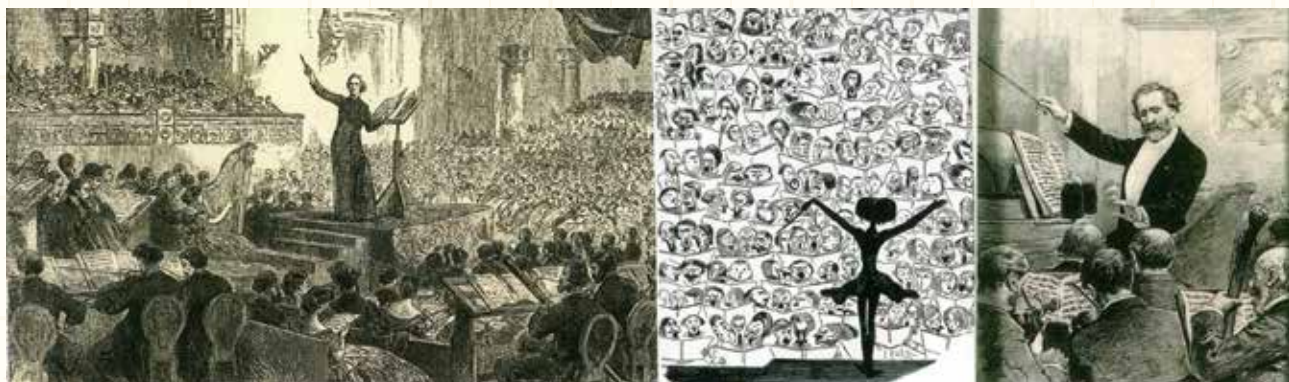


図4 作曲家兼指揮者の時代:左はリスト,中はベルリオーズ,右はヴェルディ

1844			
January 7	BEETHOVEN	Symphony No. 5 in C minor	Weimar
January 17	BEETHOVEN	Symphony No. 6 in F major (<i>Pastoral</i>)	Gotha
January 21	BEETHOVEN	Symphony No. 3 in E-flat major (<i>Eroica</i>)	
		Incidental Music to <i>Egmont</i>	
February 4	BEETHOVEN	Symphony No. 7 in A major	
	WEBER	"Jubel" Overture	
February 18	SCHUBERT	Symphony No. 9 in C major (the "Great")	
		(one movement only)	
	BERLIOZ	Overture <i>King Lear</i>	

図5 1844年にリストが指揮した曲目

288		THE YEARS OF MATURITY, 1853-1857		Liszt the Conductor		289
First Berlioz Week, November 14-21						
November 18	BERLIOZ	Opera <i>Benvenuto Cellini</i> (revised version)		January 7	MOZART	Opera <i>Don Giovanni</i>
November 20		<i>Benvenuto Cellini</i>		January 22	DOBN	Opera <i>Die Nibelungen</i>
November 21		Symphony <i>Roméo et Juliette</i>		January 27	BERLIOZ	Oratorio <i>L'Enfance du Christ</i>
		Cantata <i>La Damnation de Faust</i>				(Part Two: "La fuite en Egypte")
November 27	WAGNER	Opera <i>Lohengrin</i>		February 16	LISZT	Symphonic Poem <i>Orpheus</i> *
					GLUCK	Opera <i>Orpheus and Eurydice</i>
1853						
February 6	VERDI	Opera <i>Ernani</i>		February 19	BEETHOVEN	Opera <i>Fidelio</i>
February 16	WAGNER	Opera <i>Der fliegende Holländer</i>		February 23	LISZT	Symphonic Poem <i>Les Préludes</i> *
February 19	WAGNER	Opera <i>Der fliegende Holländer</i>			SCHUMANN	Symphony No. 4 in D minor
February 27	WAGNER	Opera <i>Tannhäuser</i>			SCHUMANN	Concerto for four horns
March 2	WAGNER	Opera <i>Der fliegende Holländer</i>		March 19	WEBER	Opera <i>Euryanthe</i>
March 5	WAGNER	Opera <i>Lohengrin</i>		March 22	BEETHOVEN	Incidental Music to <i>Egmont</i>
March 13	LORTZING	Opera <i>Zar und Zimmerman</i>		end of March	DUKE ERNST OF GOTH	Opera <i>Santa Chiara</i>
March 19	RAFF	Opera <i>König Alfred</i>		April 8	WAGNER	Opera <i>Lohengrin</i>
March 29	MOZART	Opera <i>Don Giovanni</i>				(birthday of Grand Duchess Sophie)
April 3	MOZART	Opera <i>Die Zauberflöte</i>		April 16	LISZT	Symphonic Poem <i>Maseppa</i> *
April 21	SOBOLEWSKI	Opera <i>Vineta</i>			BERLIOZ	Overture <i>King Lear</i>
May 8	FLOTOW	Opera <i>Martha</i>		April 19	LISZT	Symphonic Poem <i>Tasso</i>
May 21	FLOTOW	Opera <i>Indra</i>		April 30	MEYERBEER	Opera <i>Robert le diable</i>
May 22	MARK	Oratorio <i>Moses</i>		June 5	DONIZETTI	Opera <i>Lucia di Lammermoor</i>
June 15	AUBER	Opera <i>Carlo Braschi</i> (to celebrate the silver jubilee of the reign of Grand Duke Carl Friedrich)		June 24	SCHUBERT	Opera <i>Alphonso und Estrella</i> *
				September 16	VERDI	Opera <i>Ernani</i>
				September 23	MOZART	Opera <i>Don Giovanni</i>
				October 11	MOZART	Opera <i>Don Giovanni</i>
				October 22	WAGNER	Opera <i>Lohengrin</i>
				October 25	DONIZETTI	Opera <i>Lucrezia Borgia</i>
				October 27	SCHUMANN	Overture <i>Manfred</i>
						Symphony No. 4 in D minor
						Piano Concerto in A minor
						(soloist: Clara Schumann)
				November 9	RUBINSTEIN	Opera <i>The Siberian Hunters</i> *
					LISZT	Symphonic Poem <i>Festklänge</i> *
				November 22	RUBINSTEIN	Opera <i>The Siberian Hunters</i>
				December 10	WAGNER	Opera <i>Tannhäuser</i>
				1855		
				Second Berlioz Week, February 16-21		
				February 16	BERLIOZ	Opera <i>Benvenuto Cellini</i> (revised version)
				April 1	KÜRMSTEDT	Oratorio <i>Die Verklärung des Herrn</i>
				April 8	VERDI	Opera <i>I due Foscari</i>
				April 9	SCHUMANN	Opera <i>Genoveva</i>
				June 4	WAGNER	Opera <i>Tannhäuser</i>
				June 24	NICOLAI	Opera <i>The Merry Wives of Windsor</i>
				August 15	CORNELIUS	Mass
				October 18	LISZT	Symphonic Poem <i>Orpheus</i>
						Symphonic Poem <i>Prometheus</i> *
				November 10	BELLINI	Opera <i>I Puritani</i>
				November 18	MEYERBEER	Opera <i>Les Huguenots</i>
				December 6	LISZT	Symphonic Poem <i>Les Préludes</i>
						Braunschweig
						Berlin

図6 1853-54年にリストが指揮した曲名 その豪華さに圧倒される

リストは、ピアノのスーパー・スターとしてのツアーを中止し、作曲に専念するため、1848-1858年の間、かつてゲーテと共に文化都市として栄華を誇ったワイマールの、宮廷楽長に就任し、驚異的な数の作曲を行った。その傍ら、貧弱な宮廷楽団員を訓練し育てながら、交響曲、交響詩、協奏曲、宗教曲などの大曲を次々と指揮・演奏した。この間、ワイマール・オペラ・ハウスで上演されたオペラだけでも44演目を数える。それらは、ワーグナー「ローエングリン」、シューマン「マンフレッド」、自作の交響詩

などの世界初演を含め、モーツァルト、ベートーヴェン、ウェーバー、シューベルト、フロトー、ベルリオーズ、グリュック、ワーグナー、ヴェルディ、ドニゼッティなど膨大な数にのぼる。これらの曲を彼は、誰よりも知り尽くしていたのである。彼は、40年頃より、指揮に興味を持つ。例えば、1844年の1-2月の40日間で、ベートーヴェンの交響曲第5、6、3、7番他、ウェーバー、シューベルト、ベルリオーズを指揮している(図5)。図6は、1853、54年の演奏曲である。宮

廷楽団員を教育しながら、作曲しながらのこれら大曲の演奏指揮には、驚嘆以外の何ものでもない(図6)。この中の曲をここで説明する余裕はない。数、質、量に圧倒される。

ただ53年のソリストに、作曲者でヴァイオリニストのヨアヒム、ベートーヴェン／リストの曲にピアニストのビューロー、54年のシューマンのP協奏曲に妻のクララ・シューマンが出演している事を記しておく。

リストは、このようにして、名曲を世界に発信したのである。

なおショパンの伝記をリストが書いたのは1851年で、これにより単なる作曲家・ピアニストとして忘れ去られようとしていたショパンが、偉大な作曲家である事を世界に知らしめたのである(ショパンの再発見、宗博)。

1861年ワイマールを去るリストの送別演奏会で、リストの交響曲「ファウスト、57」を娘・コジマの夫・ビューローが指揮した。会場には、コジマの将来の夫・ワーグナーも特別の許可を得て出席した。

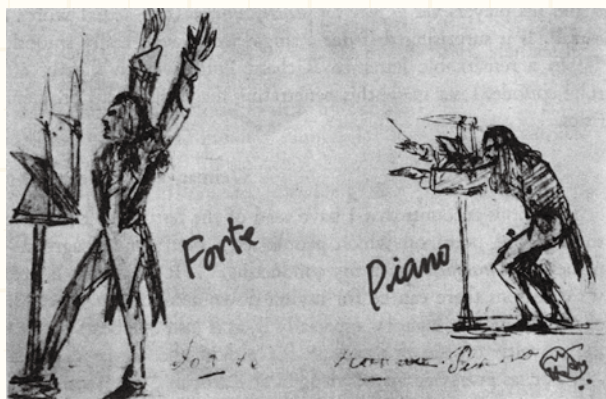


図7 全身で音楽を表現するリストの指揮姿

(付録) リストの指揮者としての見解

リストは、楽曲の演奏・上演技術、表現方法の向上のため、作曲家の延長としての指揮者の重要性を述べている。ここに私共が意識して、ごく短く要約する。

「作曲者の意図する演奏を行うには、曲全体の構成、流れを的確に理解・把握し、それを適切に演奏者に指示し、表現(色彩感、リズム、アクセント、各楽器のバランス……)

する指揮が必要であるが、このような演奏は稀である。

楽譜の上には、作曲者の意図する曲想、演奏の全てを記載する事はできない。それ故、有能な指揮者が必要である。」

(超意識、宗博)

リストは、ピアノ同様、全身で音楽を表現したが、それは、多くの指揮者により、今日まで引き継がれている。

図7は、時には動、時には静のリストの指揮ぶりをよく示したカリカチャー。

【3】ベルリン・フィルの簡単な歴史 Das Berliner Philharmonisches Orchester

世界中に交響楽団(symphony orchestra)、管弦楽団(orchestra, philharmoniker, philharmonic orchestra)が満ち溢れている。代表的なものだけで、世界中で百数十。

例えばドレスデン国立歌劇場管弦楽団(1584年創立、ウェーバー、ワーグナー)やライプチヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団(1743年創立、ヒラー、メンデルスゾーン)など古く創立した楽団もあるが、ここではその王道を歩んできたベルリン・フィルの歴史を、カラヤンまで簡単に述べる。

ベルリン・フィルは、1882年に創設され、当初指揮はブレンナー(ヴェルナー)が行っていた。この楽団では作曲家のブラームス、ドヴォルザーク、Rシュトラウス、マーラーが自作を振った事などでも知られる。

以下、常任指揮者を記す(図8)。

(1) 初代(1887-91) ビューロー

リストとワーグナーの高弟で、最高の権威と実力を持つビューローを迎えられた事は、楽団にとって最大の幸運だった。彼はこの楽団の演奏水準を飛躍的に高めた(図3)。

88年からは、Rシュトラウスも度々客演。



図8 2代目以降のベルリン・フィルの歴代指揮者
左よりニキシエ, フルトヴェングラー, チェリビダッケ, カラヤン, アバド

(2) 2代 (1895-1922) ニキシエ

この元・ウィーンの宮廷歌劇場管弦楽団のヴァイオリニストは、リスト、ワーグナー、ブラームス、ヴェルディの指揮を体験する幸運に恵まれた。27年に亘り楽団を研ぎあげた。この楽団初めてのレコーディング（ベートーヴェンの「運命」）も行った（図9）。

（95年には、マーラーが「復活」を初演）



図9 ベルリン・フィル楽団員とニキシエ

(3) 3代(1922-54)フルトヴェングラー

カリスマ性の高いこの作曲家・指揮者は、自身とこの楽団を不滅の高みに導いた。数々の名演奏をレコードに残した（図10）。

(4) 4代 (1945-52) チェリビダッケ



図10 ベルリン・フィル楽団員とフルトヴェングラー

第2次大戦後のフルトヴェングラーの活動中止後、ボルヒャルトが指揮したが、間もなく死去。その後、フルトヴェングラー復職までチェリビダッケが、若さと情熱を持って、414回もこの楽団を指揮した。功績は大。

(5) 5代(1955-89) カラヤン

カラヤンはフルトヴェングラーの死後、就



図11 新ホールでベルリン・フィル楽団員とカラヤン

任。音響に対する美意識の強いカラヤンは、この楽団を、その点に於ては最上の高みに導いた。また映像も重視するカラヤンは、もちろん音響第一だろうが、自身の演奏姿を見せるに最適のアリーナ型の最初のホール、

フィルハーモニーに拠点を移した（カラヤン・サーカス、1963）（図11）。

34年に亘り楽団を率いた「帝王カラヤン」も、「ザビーネ・マイヤー事件」をきっかけに、楽団員と反目。1989年に、終身指揮者、芸術監督を辞し、その3ヶ月後に死去。私にとっての指揮者の巨匠時代は終わった。

カラヤンは、楽団員の国際化を図る一方、自身バブル期の日本のモーレツ商社マンのように、発達した航空網を利用して、世界中を駆け巡った。多分集金マシンのように。楽団の基本理念が無いため、各国出身の団員による平等な投票のみにより、指揮者が選ばれる時代となった。指揮者も楽団も、楽団員も世界中が均質化している。伝統も消えて行く。

高額なチケット、クラシック音楽は、再び1800年代初め、ロマン派時代のパリの貴族社会の時代の社交場に戻ろうとしている。それは、それで他人が口を出すことではない。全て趣味の問題だから。時代は変わった。

その後、ベルリン・フィルの指揮者は、アバド（イタリア）、ラトル（イギリス）、ペトレンコ（ロシア）と変わった。

彼らの演奏には、若干の興味はあるが、世界中が同じだと思えば、ベルリン・フィルに

は、ほとんど興味もわかなくなった。（付録）マーラー（1860-1911）



図12 マーラーの「千人の交響曲」のリハーサル風景（右側の指揮台上から指示を出すマーラー）

マーラーは大作曲家であり、指揮活動でも知られる。1898-1901年には、ウィーン・フィルの指揮者も務めた。

ここでは、「交響曲第8番」、通称「千人の交響曲」のリハーサル風景を示す（初演時ではない）（図12）。

〔4〕不滅の指揮者は存在するか？

不滅の指揮者は、存在するのだろうか？

音楽の友社の「指揮者のすべて」「不滅の巨匠たち」「続・不滅の巨匠たち」には、20世紀を代表する指揮者が、ほぼ網羅されている。

その中で、業績のある人達が選ばれている。不滅の巨匠には20人、続・不滅の巨匠は33人、計53人である。わずか53人である！

1901-2000 17大20世紀の決定人	
1	ウィルヘルム・フルトヴェングラー Wilhelm Furtwängler
2	アルトゥーロ・トスカニーニ Arturo Toscanini
3	ヘルベルト・フォン・カラヤン Herbert von Karajan
4	レナード・バーンスタイン Leonard Bernstein
5	ブルーノ・ワルター Bruno Walter
6	オットー・クレンペラー Otto Klemperer
6	シャルル・ミュンシュ Charles Munch
6	エフゲニー・ムラヴィンスキー Evgeni Mravinsky
9	ハンス・クナッパーツブッシュ Hans Knappertsbusch
9	ジョージ・セル George Szell
11	ゲオルグ・ショルティ Georg Solti
12	カール・シューリヒト Carl Schuricht
12	カール・ベーム Karl Böhm
14	ダニエル・バレンボイム Daniel Barenboim
15	クラウディオ・アバド Claudio Abbado
16	カルロス・クライバー Carlos Kleiber
16	ジェイムズ・レヴァイン James Levine

不滅の巨匠たち一名鑑	
1	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
2	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
3	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
4	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
5	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
6	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
7	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
8	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
9	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
10	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
11	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
12	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
13	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
14	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
15	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
16	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
17	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
18	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
19	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
20	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber

続・不滅の巨匠たち一名鑑	
1	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
2	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
3	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
4	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
5	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
6	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
7	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
8	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
9	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
10	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
11	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
12	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
13	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
14	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
15	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
16	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
17	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
18	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
19	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
20	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
21	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
22	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
23	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
24	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
25	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
26	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
27	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
28	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
29	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
30	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
31	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
32	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber
33	ヨハン・シュタウアー Johann Schtauber

図13 本当に不滅か？20世紀の大指揮者、巨匠指揮者

更にその中から、20世紀の大指揮者に17人が選ばれている(図13)。

然し、もともと現代の大部分の日本人は、これらの人達の名前を知らないだろう。

結局、彼らが不滅なのは、(LP, CDを含め)彼らと共に人生を過ごしたクラシック音楽好きの私達の世代までだろう。

なんだか空しいが、彼らが私達の人生の中に潤いを与えてくれた事に感謝し、LPやCDを引っぱりだし、音楽を楽しむ事としよう。

(付録) 指揮者のサイン入りレコード

テレビを見ていると、子供達が大谷選手に群がって、ボールにサインをもらっている。楽しそうである。いい思い出になるだろう。

私共も子供達と同じレベルで、指揮者のサイン入りLPやCDを聴くのは、なんだか嬉しい。



図14 フランクリン・ミント・レコード協会の12人の指揮者達(オザワも入っている)

20世紀に活躍した指揮者のサイン入りLPが、40年位前にフランクリン・ミント・レコード協会から出された。ハード・ボックス入りで、サイン入りの本人の顔写真に、各5枚のLPが付いている。これの全てにサインする指揮者も大変だと思うが、ファン・サービスに徹するアメリカのすごさも感じる。

指揮者としては、シオルティをはじめ、プレヴィン、アバド、ジュリーニ、バレンボイ

ム、ラインスドルフ、オーマンディ、マゼール、マリナー、キューブリック、オザワ、メータの12名が名を連ねている。

日本人のオザワが入っているのも嬉しい。

この貴重な全12巻の完品は、日本では、これだけかもしれない。私が大切に保存しなければと思う(図14)。

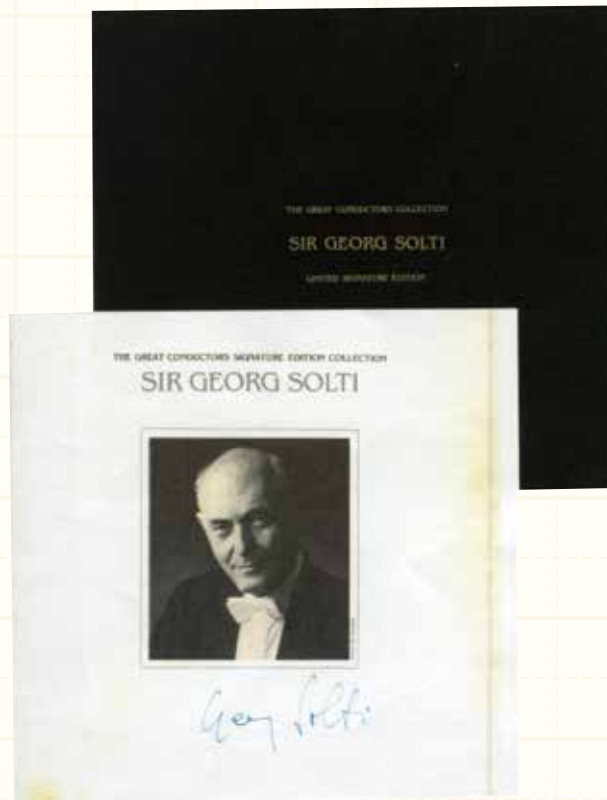


図15 ファンサービスのための5枚のレコードとサイン(フランクリン・ミント・レコード協会)

なお、シオルティは、グラミー賞受賞31回の最多記録を保持していた(小澤氏も1回受賞している)。この記録は約25年ぶりに去年(2023年)ビヨンセに抜かれた。でもシオルティもすごいと思うし、アメリカのクラシック音楽ファンもすごいと思う(図15)。

シオルティはリスト音楽院を卒業後、コンペティドールからたたきあげた指揮者で、ジュネーブ国際大会でもピアノ部門で優勝。

ワーグナーの「リング」世界初の全曲録音の偉業の実力派。夫人はALSのメンバー。

音楽の演奏の記憶は失われるかもしれないが、LPやCDはその記憶を蘇らせてくれる。

(つづく)